特集 1

「シン公衆衛生？　人間の健康増進を超えて」解題

美　馬　達　哉
（立命館大学大学院先端総合学術研究科）

本特集は、同実行委員会によって企画され、生存学研究所の共催で、2022 年 9 月 2 日（金）午後 2 時～ 6 時 30 分に対面（朱雀キャンパス 1F　多目的室）と Zoom 配信のハイブリッド形式で行われたミニシンポジウムの記録を中心としたものである。

公衆衛生という医学史での問題系を「近代とは？」という大きな哲学的問いとつなぐため、統治性（フーコー）をキーワードとした研究に携わる研究者で議論してみようという企てであった。

公衆衛生は、18 世紀以降の上下水道や塵芥処理などの都市衛生の実践と体系化に始まったとされる。そこでは、建築や工学という環境を調整するという要素が大きかった。それから時代は飛んで、1960 年代後半からは、欧米を中心に、「予防」と「健康増進（ヘルスプロモーション）」を重視する「新公衆衛生（運動）」が主流となった。それは、疾病の「早期発見・早期治療」を目指す医学とは異なった、より前倒しのアプローチといえる。そこでの問いは、人間の生活の中での行為をどう統制するかであり、「こころ」への介入という要素が大きくなった。いいかえれば、人びとの心配する健康問題の中心が、急性感染症ではなく、非伝染性慢性疾患となったことで、飲酒や食習慣、運動、睡眠、喫煙などの日常生活のあり方が病気のリスクとして取り上げられるようになったのである。

さらに、個人のライフスタイルだけではなく、社会環境への介入も、健康や公衆衛生の名の下にすすめられている。健康は人権の一つという思想のグローバル化を背景として、「プライマリヘルスケア」、「ヘルシーピープル」、「ヘルシーシティ」、「健康日本 21」などさまざまな新しい意匠が生み出されました。その最新版が、持続可能性を掲げる SDGs とみることもできるだろう。けれども、COVID-19 のパンデミックの不意打ちで、21 世紀の主流となるかに見えた非伝染性慢性疾患をターゲットとする健康増進は、揺らぎ、変容しつつある。（急性）感染症への対策という面が、公衆衛生上の問題として再びクローズアップされつつある。

これまで、人文社会系の研究者は、公衆衛生から新公衆衛生の流れを批判的に見直し、個々人の生き方や社会活動の全体に対する監視やコントロールの増大として分析する視点を提示してきた。こうしたアプローチは、ミシェル・フーコーの用語を使って、「統治性」研究や「生権力／生政治」の研究と呼ばれている。しかし、こうした視座は、今も有効なのだろうか、それとも、思考の道具箱をアップデートする必要があるのだろうか。

この集まりでは、揺らぎと変容の渦中にある新公衆衛生の行く末を、新たなステージの公衆衛生（「シン公衆衛生」）として議論した。

総合司会とコメントは、公衆浴場の研究という独自の立場から公衆衛生を研究している生存学研究所の川端美季（立命館大学・衣笠総合研究機構）さんにお願いした。続いて、美馬達哉（立命館大学・先端総合学術研究科）が、「「リスクの医学」と公衆衛生」として、フーコーの議論を援用しつつ、公衆衛生とリスクを考える枠組みを提示した。ミニシンポジウムの中心は 2 本の講演である。

科学技術社会論（STS）の立場から、ヘルスケア情報のデジタル化を研究してこられた佐々木香織（札幌医科大学・医療人育成センター）さんは、「e-Health, big-data 時代の生政治――Big-Brother イメージの超克」として講演された。佐々木さんは、この数年間、先端研での集中講義をお願いしている。

続いて、人びとの統治ではなく、環境や自然や住まいなど「非人間」の統治として公衆衛生史を書き換えようとする野心的試みを『窓の環境史』（2022、青土社）として上梓された西川純司（神戸松蔭女子学院大学・文学部）さんをお迎えして、「自然と共にある生――近代日本の公衆衛生史を書き換える」との講演をしていただいた。

その後、関連した研究分野での先端研の院生の発表として、塩野麻子さんによる「戦前期日本における「療養所不用論」と公立療養所の社会的機能をめぐる模索」とキョク・コウリン（QU Honglin）さんによる「性・遊廓・公衆衛生：日本統治時代の台湾における娼妓の健康管理」が続いた。

最後に、すべての発表に関しての全体コメントを川端さんから受けて、総合討論となっている。

なお、塩野さんの発表をもとにした論考は、厳正な審査プロセスを経たうえで、本特集の査読論文として掲載されている。

最後に、末筆ではあるが、本特集は立命館大学生存学研究所の助成による成果の一部である。記して感謝を申し上げたい。

プログラム
13 時 30 分　開場
ミニシンポジウム 1　司会　川端美季（立命館大学・衣笠総合研究機構）
14 時 00 分　あいさつと趣旨説明
「「リスクの医学」と公衆衛生」
美馬達哉（立命館大学・先端総合学術研究科）
14 時 20 分　講演 1（40 分発表、5 分質疑）
「e-Health, big-data 時代の生政治――Big-Brother イメージの超克」
佐々木香織（札幌医科大学・医療人育成センター）
15 時 05 分　講演 2（40 分発表、5 分質疑）
「自然と共にある生――近代日本の公衆衛生史を書き換える」
西川純司（神戸松蔭女子学院大学・文学部）
15 時 50 分　休憩

ミニシンポジウム 2　司会　美馬達哉（立命館大学・先端総合学術研究科）
16 時 00 分　院生発表 1（20 分発表、5 分質疑）
「戦前期日本における「療養所不用論」と公立療養所の社会的機能をめぐる模索」
塩野麻子（立命館大学・先端総合学術研究科）
16 時 25 分　院生発表 2（20 分発表、5 分質疑）
「性・遊廓・公衆衛生 : 日本統治時代の台湾における娼妓の健康管理」
キョク・コウリン（QU Honglin）（立命館大学・先端総合学術研究科）

17 時 15 分　総合討論「人新世における統治と公衆衛生」
討論に先立って 10 － 15 分程度のコメント（川端美季）
18 時 30 分　閉会（予定）